http://www.shiminkatudo-hachioji.jp/gorakuren/

１２月号　　第２４４号
発行日　平成２３年１２月１日（木）
発行所　八王子の碁を楽しむ活きいき連合
住　所　八王子市みつい台２－13－12
ＴＥＬ　（０４２）６９１－３６７１
発行人・磯部　信広
編集者・三浦　和夫

碁楽連の目的

碁楽連は、八王子市内に居住する高年者が、囲碁を通じて親睦を図り、かつ、健康を維持できるようにその機会を提供し、高年者の福祉の増進に寄与することを目的とする。

平和のありがたさ

北野寿囲碁同好会会長　山縣　文雄

最近、世界を舞台にスポーツや芸術で活躍している青年がますます増えてきているように思います。その中に親子共同で頑張っている話もよく耳にします。

考えてみれば、太平洋戦争が終わってすでに６６年、今活躍している若い人の親でさえまったく戦争を知らない世代です。小さい時に人生の一つの目標を設定してひたすらそれに向かって走る、才能を磨くということができる人たちが増えてきたということだと思います。
今年、一躍有名になった「なでしこジャパン」の選手たちは恵まれない環境の中で頑張ってきたという点て一層若い人たちの刺激になったと思います。

私は昭和８年生まれですが、若い頃、囲碁雑誌で昭和８年生まれの棋士を探してみたことがありますがどうしても見つかりませんでした。戦争が終わったとき、私は小学校六年生、東京を離れた富山県に疎開していました。授業もあまりなくなって毎日お腹をすかして食べることばかり考えていました。そんな世代から囲碁のプロ棋士が出てこなくても不思議ではありません。平和のありがたさをつくづく感じています。

また最近は、医療の進歩もあって寿命がますます伸びてきました。年を取って余生を送るどころかもう一つの人生を送る人たちも増えてきました。ここでも才能のある人たちは大変な活躍をしています。年を取ったらどこまで自分の才能を磨くことが出来るか、維持できるか、これは選ばれた人たちだけの問題ではないと思っています。

私も年を取って体力も記憶力もだんだん衰えてきました。そこで同じ本を何回も読む、テレビで録画した講座を繰り返し見る。そんなことをしてようやく理解できたかなと思いながら碁を楽しんでいます。今は特に中盤の攻防の知恵比べに魅力を感じています。

第２２回　碁楽連囲碁大会（２段以下）のご案内

日時	平成２３年１２月１８日（日）　受付午前９時～９時３０分
会場	東淺川保険福祉センター
主催	碁楽連
後援	日本棋院・八王子市・八王子市教育委員会
競技方法	３～４クラス別のハンデ戦　碁楽連方式
参加費	７００円
賞品	入賞者に賞品進呈
参加資格	２段以下の碁楽連会員で、地区寿同好会会長に申込みされた方

第６１回八王子市民文化祭囲碁大会が開催されました

八王子市民文化祭の「立ち上がれ文化の力で」をテーマに、恒例の市民文化祭囲碁大会が 11 月 3 日東淺川保険福祉センターに於いて行われました。　開会式では普段大変お世話になっております東淺川保健福祉センター志村館長よりご挨拶を頂きました。対局開始間も無くでしたが、今回はじめて黒須市長が多忙の中、わざわざ時間をさいて来場され、ご挨拶を頂きました。また、学園都市文化課長の青木正美氏、（財）八王子市学園都市文化ふれあい財団理事長の三宅壮三氏、土方亨氏が来場されました。

黒須市長の挨拶

参加者は過去最高の 134 名で昨年の 92 名を大幅に上回りました。今回は青木咲和子ちゃん（5 段/小４）、室賀洪輝君（７級/小２）をはじめ４名の小学生がおじいちゃん、おじちゃんを相手に奮闘していたこと、また、5 名の女性の参加があったことが印象的でした。尚、11 月 12 日（土）来年度の大会をより充実した大会にすべく理事、関係者により反省会を開催しました。

対局風景

対局風景

	入　賞　者	参加者数合計１３４名	一般　46名	会員８8名
S組	優勝　　小町俊明　７段（一般） 準優勝　荒井良夫　８段（技術顧問） 三位　　金本好正　６段（石川）	６段以上　　２２名	６名	１６名
A組	優勝　　小嶋英基　５段（一般） 準優勝　万場龍夫　５段（一般） 三位　　岩田大平　５段（浅川）	５段～４段　３９名	１２名	２７名
B組	優勝　　高取民治　３段（川口） 準優勝　梶原和夫　３段（浅川） 三位　　小西弥一　２段（一般）	３段～２段　３０名	１０名	２０名
C組	優勝　　平山　統　初段（元八王子） 準優勝　渡辺恵介　初段（川口） 三位　　芦野竹志　初段（一般）	初段～級位　４３名	１８名	２５名

投 稿

キノコ採りの心

長房寿囲碁同好会　池口　隆久

毎年９月の半ば頃は、キンモクセイが咲き、その香りがうるさいくらいに住宅地に満ち溢れる頃である。そろそろ私は落ち着かなくなる。キノコの季節到来である。背負いかごを肩に掛け、朝暗いうちに出かける。山の入り口で日の出を迎えるのを理想としている。このくらいの時間に出かけないと、山のふもとに住む競争相手の爺さんが（自分が爺さんであるのも忘れて相手に失礼かな)、先に山をひと回りしてしまうから、早起きもやむをえない。

ところが今年はまるで違っていた。温暖化の影響かと思えるが、キンモクセイのハナも終わり、10月の中旬になってもまだキノコの出る気配すらない。高尾のいろはの森を歩くと、その気配で分かるのである。どんなキノコでもいいから出ていさえすれば、ハラタケ、フウセンタケ、イグチ（アワタケ)、ハツタケなどあるが、どんな種類でもいいから出ていさえすればいい、およそその傾向が分かるから。私は背負いかごを背負って出かける。朝暗いうちから、自転車に乗って行きつけの山へ向かう。

かごは２種類あると良い。一つは背負いかごで、もう一つは腰につける小さいかごである。見つけたキノコを採るのに、背負いかごをいちいち下ろしていたのでは面倒である。かごを背負ったままキノコを丁寧に採り、腰につけたかごにおさめる。腰のかごに半分もとれたら、背中のかごに移す。ていねいに、しかもこわさないように。雨の日などは、こわれやすいので特に注意を要する。また、雨の日などは競争相手もいないので、沢山採れてかごの中に次々と上から入れるから、その重みでキノ

コがこわれてしまう。仕方ない。

日の出数分前の山道を露を気にしながら上ってゆく。もちろん長靴である。ズボンは折って長靴に入れる。キノコとりの名人が「ズボンは長靴の外に出しておくのがいい」と言っていたが、これは小枝や、木の葉などが長靴の中に入れるのを防ぐ意味もあるから成る程と思える。私は一度やってみたがやめた。なんとなくだらしなく見えるからだ。山道を登りながら、左の斜面を見ながら登る。右側は沢が切れ込んでいる。この沢には胡桃の木が多いので、その気になれば胡桃がかなり拾える。

尾根道に出て、見渡すと今日はない。キノコがない。いつもの通りといえばそうであるが、今日も出ていない。３５年前のことを思い出す。9月の中旬から毎日のように山に通いつめた。無いときは、尾根道を２０分も歩くとさっぱりとあきらめて家路に着く。家に帰ってきてから急いで朝食、あわてて駅に走る。こんな生活を１ヶ月も続けたら、病気になって入院してしまった。ストレスと疲労とが引き金だったと思えた。だから、キノコが出ていない朝には、その年の教訓を思い出しては、自らを慰めている。「今年は病気にならないだけましさ」と自分に言い聞かせて。

キノコとりに出かけて、取れない日の方が多い。それでいいのだと思う。人間万事良いことばかりはない。思うようにいかない日の方が多い。我慢をするのである。今回は失敗の日について書いてみたが、キノコの話は多くとれたことを書く人が多い。わざわざ上手くいかなかったことを書く人などいないであろう。だから書いて見た。

キノコが見つかって、背中がゾクゾクする話は次に譲ろう。

キノコ採り（人）の心（2）

長房寿囲碁同好会　池口　隆久

小学校６年生のとき、兄に連れていってもらったキノコ採りのことだった。川口中学校の裏山のあたりだったと思う。川を渡り、低い里山にある道をたどっていくと雑木林の手前で、農道のわきに大きなシメジが、ところ狭しと生えていた。一瞬夢かと思えた。背筋がぞくぞくした。それこそ争うように、一緒にいた４・５人が自分のかごに放り込んだ。どのかごもすぐ一杯になった。傘の直径が１０～１２センチもあるキノコだった。兄の友達たちはイッポンシメジと呼んでいたが、八王子在の人は今もってこのキノコのことをそう呼んでいる。

じつは、正確には「ウラベニホテイシメジ」と呼ぶのが正しいのだが。学名イッポンシメジは有毒キノコであり、キノコ中毒として毎年のように新聞紙上をにぎわせている。中毒でもっと多いのは、クサウラベニタケであろう。このキノコは、ウラベニホテイシメジとよく似ているし、ウラベニホテイシメジのすぐそばによく生えているので、間違えて採ってしまう人がいる。食べて１０分もたたないうちに、下痢を起してしまう。どうせ間違えるなら、ハエトリシメジを間違えて採ったらいいのにと思う。このキノコは、化学調味料の数倍のうま味成分、トリコロミン酸を含んでいて、ハエの捕殺用に昔から使われていたらしい。人間が一度に食べすぎると（５～６本)、悪酔いするので知られている。ハエトリシメジは３～４本が限度とのことである。

私の好きなウラベニホテイシメジは、傘の直径が大きなもので１５センチ、茎の高さが２０センチ

もある。標準形は直径５～７センチ、高さ１０センチぐらいだ。傘の表面は、ネズミ色で白い絹糸用の霜降り紋がある。傘の裏側は薄いピンク色である。とにかくこのキノコを５～６本群生している姿を見たら、夢中になっていのししのように突進してしまう。小さいかごならすぐにいっぱいになってしまう。　魚を釣る人の気持ちは、キノコ採り人の気持ちに似ていると思う。釣竿に伝わってくる魚の引く響きは、キノコを見つけたときの驚きと喜びに似ているのかも。

ナラタケを見つけることがある。日当たりの良いナラの古株に、キノコシーズンの終わり頃にぞっくり生えている。１箇所でも小さなかごはすぐに一杯になる。ナラタケもナラタケモドキも共に美味である。汁ものにはうってつけである。出汁がほかのキノコよりもよくでる。ナラタケは木の古株に出るが、沢に浸かっている樹木にも生える。昨年、蛇滝谷で一度だけ倒木にナラタケが群がるように生えているのを発見、遠慮して半分だけ採って帰宅した。翌朝訪れると、もうほとんど残ってはいなかった。近所の人が気づいて採ってしまったのだろう。このときのナラタケはあまりにも収量が多かったので、塩漬けにして物置に保存してある。

キノコの季節になると、私はありそうな場所を歩かないことにはどうも落ち着かないのである。歩いてなかったら納得できる。里山の状況次第で、次には何日後に来ようとか判断するからいいのだ。キノコは比較的人家に近い低山に生えるが、あまり人に踏みならされた場所には生えない。数十年前のこと、美山町にキノコが沢山採れるという話を聞いて、さっそく美山にでかけた。美山バス停留所から、藪をかき分けてかなり深い山の上まで登ってみたがあまりなかった。その人に「美山にはなかった」と話したら、そんな遠くでなくて山の低いところだという。それ以後美山には入っていない。恩方の山にはかなりありそうだが。

秋の囲碁、忘年会の囲碁

北野寿囲碁同好会相談役　刀根　正樹

『秋の囲碁　競馬のごとき　身のふるえ』

菊花賞のテレビを見た。栗毛のオルフェーブルが三冠馬になった。この馬はやんちゃで、ゴール後池添騎手をふり落としている。新馬戦でもやったという。それにしても人馬一体となって全速で走る姿の迫力、すばらしさはどうであろう。世の男達を夢中にする魅力がある。

翌週の天皇賞を見に、府中競馬場に行った。若い女性の多さにあきれた。男顔負けのハッスルぶりである。９万人の大観衆の歓声には、男心を酔わせる響きがある。それは囲碁で大石を取った時の血の騒ぎに似ている。帰途駅前の居酒屋で飲む酒には、碁に負けた夜の酒と同じ味がする。

『謝依ミン　男を倒し　仁王立ち』

NHK 杯のテレビ放送。謝女流本因坊が高原九段を、見事に破った。かわいい顔に似合わぬ力強い棋風。どこから飛んでくるかわからない強烈なパンチ。すでに第一回戦で瀬戸大樹七段を破っている。私は謝本因坊のパンチがむしょうにほしい。それにしても日本男子は何をしておるのか。気迫が足りん。勉強が不足しとる。だがよく考えれば、私も日本の男のはしくれではなかったか。

『洪水や　ほほえみのタイ　なみだ雨』

今年は地球上に天変地異が続く。ニュージランド地震に始まり、東日本大震災、三陸大津波。そしてタイの大洪水である。インラック首相は美しい顔をゆがめ、「私はもう泣きません」とほほえんだのは不自然だった。驚いたのは日系企業の被害の多さである。海外進出している日本の姿を、私はあまり知らなかったらしい。タイの洪水を別世界のことのように考えていたのか。同様に韓国や中国以外の囲碁の世界をまるで知らないのは恥かしいことかもしれない。

『カダフィの　最後の舞台は　歌舞伎調』

リビアのカダフィ大佐の最後の場面が、テレビで繰返し放送された。悲惨であり、あわれでもあったが、またどこか滑稽な感じがした。歌舞伎の白波五人男の日本左ェ門を、私は思い浮かべた。しかしそれは他人事でおさまらなかったのである。

会社の連中が私を取り囲み、「首だ」「首だ」とさわいだのである。衛生管理で社内を締めつけたのが嫌われたらしい。アラブの風が社内にも流入し、最年長の私がカダフィ並みのターゲットにされたのである。結局今回は首にならなかったが、日本はアラブでないことに気がついたのか。

『忘年会　碁を打ち生きた　よく生きた』

11 月 15 日（火）に今年第一回目の忘年会を、北野支部の酒好きの有志で行った。皆酒が弱くなったが、仲間で集り、忘年会をする喜びは、生きておればこその喜びである。囲碁は確かに精神衛生上効果がある。K 氏（４段）が、関西棋院の６段を取った。新聞テストに応募して合格したのである。忘年会の席上で披露された。老いても囲碁に挑戦し楽しむことは幸せを呼ぶ。

『囲碁の風　地震洪水　追い払い』

『来年も　明るくのんびり　囲碁の道』

◎第８回　碁楽連理事会

日時　　平成２３年１０月２２日（土）９：００～１２：００

出席者　理事５名（山崎理事欠席）、望月成一・端山昌夫氏

議案　　１：報告事項

２：会計中間報告（井出理事より）

３：第６１回市民文化祭囲碁大会について

開催要項に基づき最終確認

編集後記　市民文化祭囲碁大会に４名の小学生が参加しましたが、お母さん、お父さんが付き添いで来ていました。大会には参加しませんでしたが、対局していたお母さんもおり、ほほえましく、気持が和みました。今回は残念ながら中・高生の参加がありませんでしたが、来年度はいかに多くの小・中・高生に参加してもらうかが課題とおもいました。